



信州大学 経済学部同窓会報

第 9 号

発行者 信州大学経済学部同窓会
同窓会事務局 〒390-8621
長野県松本市旭3-1-1
信州大学経済学部内
TEL・FAX 0263-37-2309

平成22年4月12日発行

E-mail : k-doso@shinshu-u.ac.jp
URL : http://www.econ.shinshu-u.ac.jp/index.html

第九号の紙面より

- 会長あいさつ 矢口晋司
- 同窓会連合会代表あいさつ 可知偉行
- 新学部長あいさつ 徳井丞次
- 就職委員会より 村上範明
- 卒業生による講義—平成21年度
現代の産業・社会事情 都築 勉

- 会員のたより
西村文男 (1978年入学)
永井健治 (1983年入学)
蔵田玲子 (1988年入学)
渡邊一史 (1990年入学)
- 信州大学創立60周年記念
文理学部同窓会参画事業
野口清人 (1958年卒業)
高根恒子 (1966年卒業)

- 文理学部卒業生からのたより
鎌倉通敏 (1953年卒業)
渡辺瑛代 (1963年卒業)
- 理事会報告
- 平成22年度総会案内
- 編集後記

会長あいさつ

同窓会長 矢口 晋司
(1978年入学)

信州大学経済学部同窓会員の皆様におかれましては、各分野で広く活躍のこととお喜び申し上げます。平素より、母校の発展ならびに同窓会活動に対し何かと関心を頂きありがとうございます。

さて、昨年十一月七日に人文学部同窓会設立三十周年記念式典が開催され、来賓としてご招待頂き、出席してまいりました。同窓会の設立並びに運営に係わられた先生方をご招待し、信州大学交響楽団アンサンブルによる記念演奏、卒業生である「くすのき燕さん」によるユーモアたつぷりのひとり人形劇という記念講演が行われました。久しぶりに大学キャンパスに集まれた同窓会員の皆様から、学生時代の思い出を懐かしく語り合っている姿を目の当たりにいたしますと、同窓会の存在価値を再認識させられる良い機会となりました。

私も経済学部同窓会も平成二十四年三月十九日に設立三十周年を迎えることから、本年一月開催した理事会から記念行事の持ち方についての検討を開始いたしました。今後、人文学部同窓会設立三十周年記念式典を始め各方面からの情報を参考とさせて頂き、理事会で検討を重ねてまいりたいと考えております。会員の皆様方からも忌憚の無いご意見をお願い申し上げます。

経済学部も昨年十一月に徳井新学部長が就任され、新たな体制がスタートいたしました。しかしながら国立大学独立行政法人化以降、大学を取り巻く情勢は非常に厳しい状況となっており、経済学部も削減された研究費の中で成果を期待されるという極めて厳しい環境となっております。同窓会としても学部における学術研究並びに地域連携等に対し、資金面も含め支援体制を検討していく必要性を強く感じているもの、同窓会も大変厳しい財政状況にあり、具体的な支援検討

を進められない状況となっております。同窓会全員の皆様方の深いご理解と考中でのこの難局を打破していきたいと考

同窓会連合会代表あいさつ

可知 偉行

同窓会連合会は、長野県の四地区にある八学部同窓会と医学部保健学科同窓会、文理学部同窓会の十同窓会から成り立っております。

この会は各学部同窓会の主体性・活動を尊重しつつ、相互の交流・親睦を図るとともに信州大学との密接な連携により大学及び各同窓会の発展に寄与し、併せて社会に貢献することを目的として設立され五年を経過しました。

この間、毎年の入学式に於いて、全国的な活躍をした学生のサークルの表彰を行っており、特に昨年は、創立六十周年記念事業へ参画し、連合会東京同窓会支部が設立されました。全ての学部卒業生の交流の場としての更なる発展・活動を願っております。

東京同窓会のルーツを辿ってみますと、文理学部関係の諸先輩のご努力とご尽力のたまものであり、頭が下がります。

第一回の信大(文理)東京同窓会(仮称)が一九九五年二月四日 柳橋ベルモンテホテルで開催され、参加者は文理、医進、人文、理、経済、恩師を含め百二名でした。

その当時、あがたの森の校舎の重要文化財指定に向けての活動が行われ、教養部廃止に関連して学部の充実、再編がなされていきました。これより十五年が経過し、今日に至っております。以後、二月の第一土曜日に毎年開催されており、今年、学長をはじめとし各学部の学部長、全ての学部の同窓生の参加(百三十余名)

えておりますことから、この場をお借りし、終身会費の納入を再度お願い申し上げます。

同窓会員の皆様方より一層のご活躍をご祈念申し上げますと共に、同窓会もより一層発展、成長して行く事を祈念し、会長あいさつとさせて頂きます。

同窓会連合会代表あいさつ

により盛大に開催されました。田辺治氏(信大学士山岳会理事・農学部五十九年卒)の演題「厳冬のヒマラヤ巨大崖壁に挑んだ」の講演に感動し、懇親会では信大フラメンコ部によるフラメンコを観賞しました。同窓生であればどんなでも参加できますので、多くの皆様の参加をお願いします。

昨年人文学部同窓会東京支部が設立されましたが、ぜひこれを機会に全ての学部で支部を立ち上げて頂き、連合会東京支部を盛り上げて頂くよう切に希望いたします。さらには、東京に限らず他地区にも支部が出来、学部を超えた同窓生の親睦が図られることを期待しています。

同窓生の活躍と交流・連携が各学部の同窓会の発展に繋がります。その力を結集して大学が発展する糧を提供し、活力ある同窓生を排出していただければ、それを共有の誇りとし、こんなに素晴らしい大学の卒業生であったかと嬉しさと喜びに繋がると思っています。さらに連合会なく、信州大学同窓会が発足することを願っております。

青春時代を学問に遊びにと楽しかった昔を思い起こし、また後輩との懇談を兼ねて信州を訪れて頂くのは、地域貢献・地域活性化にもつながりますので、今一度おいでいただきたく願いますと共に、皆様の益々のご活躍、ご健勝を祈念し挨拶いたします。



新学部長就任のご挨拶

徳井 丞次

昨年十一月から、経済学部長に就任しました。現在五十歳です。この同窓会の皆様のなかで経済学部創設時に入学された経済学部第一期生の方々の同年代です。同窓会員のなかでこの世代の方々、お勤めの職場で既に重職を担われている方も多く聞きますが、私もこのたびその驥尾に付すことになりました。先達の皆様から叱咤激励をいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

昨年は信州大学の六十周年で、六月には大学の記念行事も行われましたが、それに合わせて経済学部同窓会も総会を開き、その後は昼食をとりながらの懇談もあり、参加された卒業生の皆様から懐かしい思い出話を伺いました。また、一昨年には経済学部の三十周年記念行事を行い、その企画の一つとして、第一期生から五年おきの卒業生六人の方々にパネラーになっていただき私が司会をして大学時代の思い出や大学に対する期待を語っていただきました。こうした卒業生の方々の思い出話を伺いながら、我々が普段気付いてない信州大学の良さの一つに、多くの学生が松本という狭い空間で互いに近い距離に暮らして、青春時代を共に過ごすことがあると思いました。

また、この二月六日には、信大東京同窓会に参加してきました。土曜日の午後三時から七時過ぎまでの集まりでしたが、その前半は講演会、大学からの報告、東京同窓会総会の議事があり、後半は食事をしながらの懇親会でした。なかでも講演会では、本学農学部卒業の田辺治さんから、迫力満点のスライド写真を見せていただきながら、冬のヒマラヤ登山のお話を伺いました。この方は、既に二十五回を超えるヒマラヤ登山の実績を持ち、ヒマラヤのなかでも別格の厳しさがあるローツェン壁の冬季登頂に隊長として挑み三度目の挑戦で成功された人です。年齢は、私より二歳若い方です。

講演では、二度の失敗と三度目の成功の一連のお話を伺ったのですが、三度目の成功のお話にもまして、その前の二度の失敗のお話にもまして、田辺さんの偉さを感じました。大変な難所を幾つも乗り越えて頂上まであと少しというところまでたどり着いている訳です。また、急に下世話なお金の話で恐縮ですが、こうした難しいヒマラヤ登山に一隊を率いて登るには約一億円の資金が必要だそうです。この一億円の寄付をしてくださった方々は、もちろん登山成功を期待しているはずですが、これは私の想像ですが、田辺さんが登山を中止して引き返す決断をしたときにも、こうしたことが頭の片隅を過ぎたに違いありません。それでも、これ以上進むと隊員のなかの誰かが死ぬなどというぎりぎりの判断に達した時、二度引き返す決断をしました。またこの二度の撤退の決断が安易な判断ではなかったことは、田辺さんに三度目の挑戦をするための資金が集まったことが裏書きしています。

就職委員会より

就職委員から見た信大経済生

就職委員長 村上 範明

私が就職委員になったのは五年前のことであった。その頃から景気が上向き、信大経済学部生の就職率は95%を超え、信大の就職活動は企業も、学生の間に人気の高い企業が多くあった。これは私の努力というよりも、なによりもまず、前任者の努力に負うところが多い。というのも、就職率は卒業時で計るのに対し、就職活動はそのおおよそ一年前の三年時末から四年年初めにかけて行われるからである。そこには一年のタイムラグがある。私は前任者の一年前の努力の果実を摘み取っているに過ぎない。これに加えて、景気が上向いたということも重なったのである。

しかし、幸か不幸か多くの教員がこのタイムラグに気付かず、私の功績であるかのように、錯覚した。さらに、『東洋経済』が学部別の就職率の特集をしたのであるが、そこでは国立大学で一位という成績になった。従来、マスメディアなどでは、就職率は大学全体で就職率を報道することが通常であったが、『東洋経済』のこの試みは、信大経済にとってはまだことにありがたい企画であった。

近年、オープンキャンパスと言って高校生やその保護者らに対し、説明会をするのが当たり前になってきたが、信大経済で言うオープンキャンパスは参加者が年々増加し、昨年からは午前と午後の二回に分けて行うくらい盛況である。そこで目玉の一つは、信大経済の就職率の良さである。これが受験生を集めるのに相当寄与しているのは、間違いない。

には持ちません。経済学部の同窓会は、毎年、懐かしい松本キャンパスで行われています。また、東京周辺に住まいの方で、なかなか松本まで行く時間がないという方は、東京同窓会でお会いしませんか。

ところで、景気がよければこの大企業でも就職率は上がる。しかし、一様に上がるのではなく、信大経済生の就職率がとくに上がるのは、なぜだろうか。根本的には、過去に卒業され、今現在企業で働かれているみなさんのおかげであると思う。信大経済生を採用してみたら、戦力になった。働きぶ

現代の産業・社会事情

卒業生による講義 | 平成21年度
教育企画委員会・交流系科目部会長 都築 勉

平成二十一年度の信州大学経済学部の交流系科目「現代の産業・社会事情」を担当致しました。率直に申し上げてこれまでもこの科目の存在を認識はしていましたが、担当させていただいて初めてその大きな意義に気付きました。委員の仕事はまず当該年度の講師の方々の話を傍聴させていただきました。月々から七月末にかけて五日間、計十名の方にお越しいただきました。人選はすでに前年度の委員会ですんでいますが、卒業生にきていただくのだから、もちろん学生たちのためになるに違いないと思つていました。彼ら彼女らの関心も想像した以上に大きなものでした。中には平気で大教室に遅れて到着する者もいます。これは私の授業でもそうなので、日頃の指導不足を恥じ入ります。しかし全体として熱心に聴く

りがよい。会社への貢献度が大きい。それを見た上司や人事担当者が、信大経済生をもっと採用したいと意欲を抱いて下さるからではなからうか。こう考えてくると、就職委員として心配なのは、就職できるかどうか、もあるが、長期的には、企業に入つて、きちんと役だっているか、である。昨年来、景気が大きく落ち込み、就職活動が突然厳しくなった。それを見ていた現四年生は、一つ上の学年よりさらに真剣である。彼らを支援したいという気持ちには強いものがあるが、同時にこうした試練を乗り越えて、無事希望の企業に入れた学生は逸材に違いなく、ぜひそこで頑張つて、後輩への採用意欲を駆り立ててほしいと思う。

私はこの四月で就職委員をお役御免になる。最後の二年間は厳しいものがあつたが、全体としては、大変ラッキーな時期に就職委員を務めることができた。幸運に感謝したいと思う。

平成21(2009)年度 担当講師一覧 (敬称略)	
氏名	入学年
吉崎 裕史	1983
大山 公明	1986
関谷 昌英	1986
小野 健	1987
古川美代子	1987
山岸 寿美	1987
市川京之助	1992
寺村 英樹	1995
那弟武香出瑠	1996
矢野 剛	1999

勤務先	
日立ソフトウェアエンジニアリング(株)	
関東信越国税局高崎税務署	
富士機械製造(株)	
電気化学工業(株)	
アサヒビール(株)	
abn(株)長野朝日放送	
西尾市役所	
関西電力(株)	
日本電気(株) (NEC)	
金融コンサルティング会社	

会員のたより

地域資源は宝の山

西村 文男

(1978年入学)

あれから三十年が経とうとしている。当時の私は、東京の大学への思いを捨てきれず、大学にあまり馴染めずいた。もっぱら、美ヶ原や高ボッチ、上高地、乗鞍、白馬、志賀高原などに出かけては授業をサボっていた。そのせいで仲間より長く大学にいたことになった。当時は大学で顔を見ることがない兵つわもの感がたつた。私などまだ可愛い方であった。大体が信州の自然に魅入られて、長居をしている先輩達であった。

私もそんな先輩達同様、アルバイトをしながらスキーにのめり込み、一冬中、全く大学に顔を出さない年もあった。お陰でスキーの腕前は上ったが成績は下がり、大学に所属しているだけという状態になった。

そんな状況に終止符を打つことになったのが、当時、兄貴のような年齢だった青才先生との出会いであった。青才先生のゼミに入った私は、古典としての奥深さを持つ「資本論」に興味を感じ、ゼミだけは休まず出席した。

講師としてお招きする方々は、もちろん年度によって異なりますが、大体三十代後半から四十代前半です。またそんなにえらいわけではない。と言いつて、社会の荒波には十分に揉まれているから、たくましくなっている。学生たちからすれば、普段の授業では味わえない社会の雰囲気、仕事人たちの大概を目の当たりにすることができません。

学生たちが提出する毎回のコメントカードを整理し、最終レポートをチェックするのも委員の仕事です。コメントカードはコピーをして講師の方々にもお届けしています。それらを読

んでも、全体としてよく聴いていることがわかります。自分の授業はこれだけ聴かれているかとしつかり反省する機会にもなりました。

後半の大きな仕事は次年度の講師の方々の人選をすることです。ゼミの先生方に御推薦をお願いすると、多くの秘蔵っ子たちの名前が挙がって来ます。現在は御依頼をしている最中です。分野においても年齢においてもできるだけ多様な顔ぶれになるように心がけています。皆様御多忙であるにもかかわらず、ありがたいたく多くの方々に快くお引き受けいただきました。これも同窓生の皆様方の愛校心の現れと深く感謝しております。

といっても、青才先生も自然が好きだった(と私は思っている)せいか、私達を提案すると、よく自然のなかでゼミを開いてくれた。サボり癖の着いた私は、ゼミを開催する場所に行き、その空気の中で、少しだけ勉強することになり、ゼミの内容以上に喜びを感じていた。その後、先生には夏休みの海水浴ゼミや冬のスキーゼミなど多くの野外ゼミを開いて頂いた。また先生の官舎にも度々押し掛け、奥様の手料理をご馳走になったこともあった。青才先生、奥様、その節は本当にお世話になりました。

こんな私でも仲間より遅れて何とか卒業することができた。私の大学時代の思い出は、勉強よりも自然との関係の中で蘇るものばかりである。

その後、社会人となった私は、大学時代の不勉強のツケを払わされることになり、三十歳まで勉強に明け暮れる日々を過ごした。三十歳で税理士試験に合格し、今日まで二十年以上に渡り何とかやってこれたのも、大学時代以来の自然との触れ合いにより、自然界が私に気を与えてくれたからではないかと思っている。

私のクライアントは全国に及んでいるが、どこかの地方にも、特に田舎には隠れた魅力がたくさんあると思う。そ

こに住んでいる人たちは、必ず「ここには何も無い」というが、自然の中で育った私には、素晴らしい自然との触れ合いがあり、自然界からいつの間にか元気をもらっているように見える。何もないという山があり、川があり、昔ながらの生活がある。どこかに忘れてきてしまった、心の拠り所があるように私には思える。

インターネットの普及や高速交通網の整備は生活に利便性を与えてくれた。一方、じつくりと本物を見つめる時間や感じる心を忘れさせたように思える。情報が簡単に手に入るために、表面的な情報で全てが判ったように錯覚する。それ以上のもので手に入れるために、現地に赴き感じることが妨げられているようにさえ思える。

昨今、この自治体でも、地域ブランドを生み出そうと苦勞している。自然ブランドであったり、農産物であったり、様々なブランド戦略が展開されているが、これらブランドが認知されていくためには、現地に足を運び、その地域の資源に触れることが不可欠だと思ふ。そしてその地域に住む人達が、まず「何も無い」という思いを改め、「ここを見てほしい」という気持ちになることが必要だと思ふ。

偉そうなことを書いてしまったが、田舎大好き、山登り、川遊びに相変わらず興じている中年おやじとしての人が、素晴らしい地域資源をより多くの人々が感じ、じっくり訪れることで地域活性化に結びついていくことをひたすら望んでいる。

昨年、島根県で石見神楽を何度か見舞の中で使用した剣や弓をもらって帰った。今は事務所に宝物として飾ってある。石見地方には、神楽の舞がいたく地域文化が引継がれ、それを守るために若者が地元に着き、これは地域にとって理想的なことだと思ふ。都市と地方の格差により、若者の都市への集中という社会現象がより強まっている。これが進んでいくと人が住めない田舎が増え、更に地方は疲弊していくことになる。地域の自然や文化や暮らしが見直されるべき時が来ていると思ふ。そこには、私から見れば素晴らしい宝がいっぱいあるように思える。

経済学部 発展の時代

永井 健治

(1983年入学)

信州で生まれ、大学時代まで信州で暮らした私は、是非とも信州の自然文化、暮らしと大学の結びつきがより強まり、これからの人を惹きつけて止まない大学として、その特性を更に発展させて欲しいと思っています。微力ながらお役に立てればと思っています。

最近のTVコマercialで気になった言葉に、「コエ出してエコ」があります。ご存知AC(公共広告機構)のCMですが、コンビニ店員と女子高生の戸惑いが表現されており、日常生活にありがちな事ですが、なかなか的確に再現されていると思えます。単純で気に入っております。

時代は環境問題を重視し、猫も杓子もECO、エコであります。いつの間にかエコなる言葉は、節約を表す言葉にさえなっております。典型的なサラリーマンである当方には非常に便利な言葉であり、時としてケチとエコをすり替える事さえあります。なかなか便利です。

愛知県出身の当方は、長野県の企業に就職し、県内を巡る通勤族です。妻子を持ち、小さいながらもマイホームを持ち、多額の住宅ローンまでゲットしました。順調にいけば、一人息子もこの四月から信大生となるのですが、こんな当方にとって、節約は日常的な課題であり、趣味とさえなりつつあります。寂しいかな現実です。

思い返せば、学生時代も随分と節約しました。奨学金を借りながらも資金不足は日常茶飯事であり、懐が寂しくなると日雇いのバイトで凌ぎました。ある時期は居酒屋でバイトをしましたので、閉店後の暗い食で食費を浮かせたものです。こんな当方ですが、二年の途中までは浅間温泉に住んでおりましたので、お風呂だけは不自由しませんでした。なんせ一ヶ月千円で入浴し放題ですから、朝風呂などは当たり前です。二年の前期試験では、試験勉強

の徹夜明けに入浴した後、下宿で居眠りをしてしまいました。気が付けば昼でありまして、英語と憲法の試験を寝過ごしました。幸い英語は追試で単位取得となりましたが、憲法はシッカリと不可をいただきました。憲法は必須科目でしたので、三年で再チャレンジしたことを鮮明に記憶しております。今となれば良い思い出です。こんな恥を思い起こせば、当方にとってエコは学生時代からのお友達であります。歳をとっても変わりません。

こんな事からふと思ったのですが、我々経済学部も略せばエコではありませんか！ 在学中は暇な人文、遊びの経済と言われ、大学の中でもやや肩身の狭い思いもしますが、時代はエコです。経済学部の時代です。ここはひとつ大きな声で、経済学部をアピールするべきではないでしょうか？ 当方は昭和五十八年の入学でしたので、ユニーク入試の第一期生でありまして、同級生には当時の共通一次で失敗し、二次で挽回した人もいました。アグネスチャンの講義も聞きました。様々な試みが新鮮であり、「経済学部ここにあり」と言わんばかりの時代だったと思えます。最近の当方は思考回路までエコ(節約)でありますので、母校の発展のための良い施策が即座に浮かびませんが、どなたか良い知恵はありますか？ 微力ながら当方も協力させていただきますので、どなたか大きな声で企画、立案してください。

経済学部の発展のために声を出す。当方なりの「コエ出してエコ」でありました。

新時代にむけて エールです

蔵田 玲子

(1988年入学)

洗練された外観、ピッカピッカの床、真冬でも暖かい空調、学生専用のパソコンルームも完備、ウォッシュレット付きのトイレ。我学び舎かと思えるほど経済学部が変身していました。経済学部の新校舎、同窓生の皆さんはご覧になりましたか？

一昨年、経済学部三十周年記念式典におじゃました時に限なく校舎を見学させてもらいました。ハードひとつとっても大学を取り巻く様々な環境が大きく変わるうとしていることを痛感しました。私は仙台出身です。十八歳の春、親元を離れ不安だらけで信州大学にやってきたことを今でも鮮明に覚えています。しかし数カ月もすると、すっかり大学生活に「はまりました。好きだった音楽に没頭し、手探りで一人暮らしを始め、友人達とつるんで大自然を満喫し、アルバイトでの初給料に感激し、人生こんなに楽しくていいのかもしれない」と思いうれしさを覚えました。ここまで読むと学業面がいかにか希薄な学生生活だったか露呈してしましますが、今振り返ると、私にとって大学生活での最大の収穫は、人を通して世界を広げられたということだったのではないのでしょうか。

大学って面白い場所です。友人の友達にはみんな友達になる。例えば、同じ学年の学部生は自然に顔見知りになっていくし、学食で同じテーブルにつけば、味を同じくする仲間がドッと増えて、ゼミに至っては教授を親代わりに家族のような気心知れた共同体になり、縦横無尽にネットワークが広がっていききました。私が所属していたゼミには多くの留学生がいました。彼らと付き合うだけで異文化を感じられたり、議論の中で思考の深さや価値観の多様性に感心させられたり。人を通じて世界を無限大に広げることができました。

この開放的な土壌こそ経済学部独特の風土と言ってもいいでしょう。当時から経済学部では社会で活躍している外部講師を招いたり、常に大学内には「外」からの風がビュンビュン吹きこんでいました。社会との風通しが良かった。結果「人は人から学ぶ」という姿勢を大学で学ぶことができたのです。その収穫が今の私を支えています。

現在、放送局でニュース番組を担当している、日々、現場に出かけます。火災現場から裁判、政治モノ、季節の話題、グルメまで、広く浅くあらゆる現場が対象です。当然、様々な方達から話を聞くことが「取材」の基本です。もちろん聞きにくいことをぶつけなければならぬ場面もあれば、胃がキリキ

りと痛くなるような現場もあります。が、「相手も同じ人間、分かってくれれば」という妙な自信や、怖いモノ知らずで相手の懐に飛び込んでいく術は、「経済学部仕込み」と言ってもいいでしょう。また、信大ネットワークにも助けられています。取材をしていてお互い「信大出身」と分かるや否や急に距離が縮まり、思わぬ「特ダネ」を頂戴することも！

政権交代となった去年の衆院選と、去年六月から始まった「裁判員制度」などでは、経済学部の先生方にニュース番組に生出演していただき、私達テレビ局と経済学部とのパイプを構築することもできました。そこで一つ提案です。

大学内で構築した研究や、優れた技術、ノウハウを、もつともっと広くアピールし社会に発信してみたいと思います。年末、信大も鳩山政権下の「事業仕分け」に揺れました。もちろん学問を「効率」「成果」という尺度だけで計れないのも事実です。が、削られる予算に「政府の理解不足」と嘆いてばかりはいられません。大学内を取材してみても、驚くほど充実しています。内容もニュースネタが転がっています。今すぐにも社会で応用できるようなものもたくさんあります。私達マスコミを大いに利用して大学の良さを知らせてもらう手間を惜しまないでほしいです。そうそう！去年の衆院選で、「若者と選挙」をテーマに経済学部の、政治を学ぶゼミを取材させてもらいました。何を基準に投票するのか？という問いに、学生達が自由闊達に生き生きと自分の言葉で語り合っている姿を見て、学時代が妙に懐かしくなりました。校舎がビカビカに変わっても、経済学部の精神は後輩達にしっかりと受け継がれています。

社会に出ると、楽しいこと苦しいこと色々ありますよ。ちよつと落ち込んだ時、つまづいた時、同窓生のみなさん、どうぞ学び舎を訪れてください。ちよつと年を重ねた先生方が変わらぬ笑顔で迎えてくれることはもちろん、不思議な勇気をキャンパスが与えてくれるはず。大学から社会へ、社会から大学へ」がモットーの信州大学経済学部の、さらなる飛躍と発展を願わずにはいられません。

大学卒業後を振り返って

渡邊 一史
(1990年入学)

私は東京の下町の出身です。大学を決めるに当たり、近所の図書館にあった神林経済学部長(当時)の本に偶然出会い、経済学部を知ったこと、信州大学に決め、見事入学することとなりました。

大学在学中は、浅間温泉周辺に住み通学しておりました。松本の冷凍庫のような冬の寒さを思い出します。冬は路面が凍結してよく転がりました。(笑)

そんな私も、平成六年三月に卒業して、かれこれ早いもので十六年目となりました。

卒業後、平成六年四月に旧文部省に入りましたが、当時はまだ、本省の直接採用は無く、茨城大学に二年ほど勤務しました。

その後、本省(東京・霞ヶ関)に異動となり、人事課に配属となり人事記録の整理等を担当した後、初等中等教育局に異動し、職業教育を担当することとなりました。

旧文部省内において、初等中等教育局が所管する職業教育は、農業、工業、商業高校等の専門高校、いわゆる職業高校であり、高等教育局は高等専門学校(高専)、生涯学習局は専修学校等を所管という具合に、学校種毎に分かれておりました。私は、主に補助金や庶務等担当の業務を担当しておりました。

平成十三年には、省庁再編があり、旧科学技術庁と統合し文部科学省となりました。

同年、茨城県つくば市にある某独立行政法人に異動になりました。

当時はまだ、東京から、つくば市迄の鉄道(平成十七年より、つくばエクスプレスが開業)が無く、高速道路が一本通っていないだけだったこともあり、東京から約六十キロメートルの距離をクルマで通うこととなり、とても大変でした。

その後再び、本省(東京・霞ヶ関)に戻り、国際課に配属となりました。国際課は、対外務省の窓口で、仕事



内容も多岐に亘りますが、私が担当したのは、極東地域と人権問題、具体的には、主に拉致問題、児童の権利条約にかかわる陳情対応等を行いました。ちなみに何故、拉致問題に文部科学省が関わるのかと思いませんが、拉致被害者の生活支援は厚生労働省が担当なのですが、どうしても子弟の教育の問題が生じて来るので、文部科学省が関わっていた次第です。

国際課と言うと、海外出張が多いように思われますが、私の担当内容は、あまり出張とは縁がありませんでした。それでも二回ほど、中国と韓国へ行く機会を頂きました。

私は大学在学中、第2外国語として中国語を選択していたこともあり、今でも中国語の勉強が好きで、細々と続けておりましたが、なかなか中国語を話すのは難しいです。

ちなみに近年、短い休暇を利用して、中国語の学習を兼ねて台湾に行き、台湾高速鉄道(新幹線)に乗ったり、世界でもっとも高いビル？(最近、ドバイのブルジュ・ハリファに抜かされたらしい)と言われている台北101も見学したところです。

話は若干逸れましたが、総理官邸(東京・永田町)にも、何度か行く機会を頂きました。平成十七年三月には、小泉総理(当時)にお会いしたことがあり、とても感動しました。小泉総理は小柄な方なのですが、大変なオーラを感じたことを、今でも覚えております。(写真参照。右端が小生です。)

国際課の後には、スポーツ・青少年局に異動となりました。

スポーツ・青少年局では、最初の二年は生涯スポーツを担当してましたが、生涯スポーツは、イベントが主で、毎年十月の体育の日、国立スポーツ科学センターで、子供向けのイベント等を担当したり、少年相撲教室の関係で日本相撲協会に行ったりしました。

その後は、学校給食の担当となり、昨年は、春頃は新型インフルエンザ騒ぎで電話対応等、秋頃は事業仕分けの対応等に追われたところでした。

今回、この原稿を書く機会をいただいて、大学卒業後、そのまま文部科学省に入ったが果たして、今まで、何をしていたのか、改めて見つけ直すことができました。

大学を卒業した今でも、政治に関心があり、新聞や本をよく読んで、日々精進しております。

話は変わりますが、昨年は、友人の山梨の金融機関に勤める樋泉氏や野地ゼミの一年後輩で松本市内の老舗菓子店に勤めている奥原氏とともに、十年振りに同窓会総会に出席し、信州大学六十年記念行事にも参加しました。

経済学部は、十数年前も、既に建物が増築され講義棟が増え、空調設備等が付いておりましたが、今回は、一層綺麗になっていった感じがしました。その一方で、旧教養部近くのプールや棟数は減ったのかも知れませんが、旧日本陸軍の兵舎などは残っており、旧日本旭会館の生協食堂にも入ってみました。が、当時と違って色々なメニューがあり、沖縄料理等もあって驚いたところです。

大学の周辺、浅間温泉近辺も歩いてみました。当時の風景が色濃く残っており、当時より閑散としていた感じがしました。

近年、私は松本から足が遠ざかっておりましたが、これを機会に大学に目を向け、松本にも行く機会を増やせればと思っております。

松本は、新宿から「スーパーあずさ」に乗れば二時間半で行ける距離で、国宝・松本城、アルプスの山々を見ると、パワがもらえる感じがします。

次回、機会があれば、浅間温泉や安曇野のわさび畑に行き、リフレッシュしたいと思います。

信州大学創立60周年記念 文理学部同窓会参画事業

映画「ララ、歌は流れる」 ——中山晋平物語——

表現者としてのあり方を自問しながら音楽家中山晋平の作曲行脚をたどる

脚本・監督 野口 清人

（文理学部人文学科 1958年卒業）

映画『ララ歌は流れる』をご覧になった方は、登場する中山晋平が一本指でピアノのキーをたたきながら作曲している姿をみて多分首を傾げたのではないかと私は想像しています。

一本指で本当に作曲したの

東京音楽学校（現東京芸術大学音楽学部）ピアノ科を卒業した人が「一本指」で作曲するなどという話は常識では考えられないことです。晋平が作曲するイメージは常識的には両手を使得ってピアノに向かっている姿になるのではないのでしょうか。

「一本指」による作曲については、晋平の子息・卯明の連れ合い、中山富子さんに聞いて知ったことでした。「早朝あるいは深夜に閃いて、或いは「散歩から帰宅するとそそくさとピアノに向かっ」という答えを期待して「晋平先生が、作曲をなさる様子を知りたいのですが？」という私の問いに、富子さんからの返事は「それがとても変なんです。晋平先生は一本指でピアノをたたき、何度もそれを並べかえているんです」というものでした。富子さんにしても「一本指」はカルチャーショックだったようです。答えながら可笑しさに堪えきれない様子でした。これは晋平の身近にいた人の証言です。たまたま訪れた際に、一本指で鍵盤を叩いていたのを見つけたのは訳が違います。真実でしょう。

そのことを知ったとき、はじめに思ったのは「助かった」と言うことでした。何故かという、晋平役に選ん

だ人は少年役から老人役までピアノの演奏が出来なかったからです。手先はピアノが弾ける別の人のものを撮影して差し替える方法をこの映画では採用するつもりでした。一本指による作曲が事実ならば、最小限の差し替えて済みますから。不謹慎にも「助かった」と思ったのです。

しかし、この「一本指」による作曲の裏には実に重い問題が潜んでいました。富子さんの返事の意味するものに分け入ってみたいと思つたものですが、晋平の日記や手紙などを繰り返し読み直しました。直接「一本指」に言及するものは見つかりませんでした。音楽の原点に立ち返ることの大切さについてはしばしば言葉にしてみました。

恩師島村抱月の「民衆を忘れては芸術は成り立たないよ」という教えと敬愛する母親からの「私にもうたえる歌をたくさん創っておくれ」という願いに対する晋平の創作上の答えに当たる部分で、「大衆問題は晋平の前には大きな壁となって立ちちはだかり、その難問の解決に苦闘してまいりました。辿りつたのが音楽の原点とも言える素朴な音列づくりで、曲づくりの原点に分け入る過程で掴んだのが一本指だったのでしよう。

高等教育の場で音楽を学んだことのない「民衆」（当時の言葉で「庶民」「大衆」と言い直しても良いかも知れません）がうたえる歌とはどういうものか：絶え間ない自問自答を晋平は繰り返しました。民衆の一人である目の前にいる松井須磨子作品を口移しで教えても、半音の#記号を表現することすらできません。晋平が立ち会わなかった「カチューシャの唄」のレコード吹き込みでは、♪せめて淡雪の♪に付けておいては、♪は無視されてきました。実兄への葉書をなかぞのことに對する悩みを訴えてはみたものの、愚痴にとどまり、本質的な解決には至りません。東京音楽学校で学んだ価値観を物差しにしない作曲の方法を

探る努力が続けられました。西洋音楽がわからない大衆を「能力に欠けた人」と看做して良いのだろうか。西洋音楽を学んだ側の先入観故に、大衆の頭から一歩抜け出す道の一つとして音を並べ替える方法に行き着いたようです。しかし、和音の進行で表情をつくる考えを捨てたわけではありません。その結果はどうだったか。世界的なフリージャズピアノニストの山下洋輔氏は映画『ララ歌は流れる』のインタビュのなかで語っています。「中山晋平さんの曲は基になっている音列がすくく素晴らしいです」と。山下氏は晋平の作品『砂山』『兎のダンス』『シャボン玉』『あの町この町』『雨降りお月』などを例示しながら「音列には、いくら掘り起こしても尽きないような何か埋め込まれている」と語っています。

山下氏が例示の一つにあげた『砂山』は北原白秋の詩に曲をつけたものですが、結果的に名高い作曲家五氏による競作になりました。晋平の曲はそのなかでもダントツの出来栄です。四分の四拍子の曲には「野趣を込めて」の指示があり、「低音部は太鼓のつもりで」と民謡「樽きぬた」の太鼓イメージを内包したもので代表作のひとつになりました。

（一つひとつの音を並べる方法は最近欧米でも有名な音楽家が次々に試みています。とりわけ音楽教育の場面では盛んで、ベルリオーズやマーラーの曲を素材にしたDVDも幾つか出ています）「原曲に戻る」とは、もともと歌には「わらべ歌」や「仕事歌」とも当然含まれています。

うたう者の思いを引き受ける

晋平音楽は「わかりやすく、楽しい」と言われています。そのための努力は並大抵のものではなかったようです。例えば童謡の実質的な処女作『てるてる坊主』をみてみましょう。私は最初に創った『てるてる坊主のうた』を追いかけて、東京・上野にある国際児童図書館に出かけました。『少女の友』大正十年六月号を借り出して、載っている楽譜を見たときのショックを忘れることはできません。楽譜の前半は口短

調四分の二拍子ですが、後半になるとイ短調四分の四拍子に転調してしまつた。八分音符と四分音符が中心で、十六小節の作品でした。早速うたってみましたが、なかなか難しい。ところがこの時から一年余を経過して改作発表した『てるてる坊主』の方は映画でも紹介しましたが、四分の二拍子に統一したうたえに、後半が低くうたい難いために一音高くし、更に嬰ハ短調からイ短調に転調、八分音符は十六分音符に、四分音符は八分音符に変え、全体を12小節に縮めたのです。このためウキウキしたリズムを刻むことになり、短調なのに明るさを感じさせる歌になりました。詩は一連を全部カット、原作の♪お酒を♪の「を」を「も」にしました。

歌いやすく、且つ魅力的なものにするために原詩に手を加えることは一度や二度ではありませんでした。「証城寺の狸囃」（大正十三年十二月）の原詩が♪月夜だ 月夜だ友達来い 己等の友達ア どんどこどん♪だったことを知っていた人は少ないでしょう。大正十四年一月の『金の星』では現在のうた「証城寺の狸囃子」になり、♪証証 証城寺♪ ツ ツ 月夜だ 皆出てこいこいこい♪に変え、♪ぼんぼこぼんのぼん♪でしめたのです。出張から帰って、このことを知った雨情は多分仰け反つたのではないのでしょうか。

長野県小坂小学校に招かれて指導した「シャボン玉」は別の意味で「うたう者の思いを引き受ける」作品としてつくりあげました。この歌の詩は雨情が一九二二年十一月に大日本仏教ドモ会発行の『金の塔』に発表したものです。子どもを亡くした親の鎮魂歌という説もあり、「消えた」が四回も書かれる暗い内容ですが、晋平はその楽譜に「ゆかいに」うたうように、という注文をつけています。青臭いペシズムに落込むことを避けようとしたものと思われれます。原譜は変ハ長調で書かれており民謡のテクニクを取り入れたユニークな旋律を使っています。スピードをあげたうたうたうたうた、スローにうたうと物悲しいうたになりま

す。それに♪風 風 吹く♪のところに伴奏譜がありません。映画では「みなさんの好きなように歌って...」という台詞を入れておきました。クラ

シックのヴァイオリン曲には演奏者に一定の部分を任せるものがありますが、大正時代の童謡のなかでこうした大胆な試みを晋平はしていたのです。晋平は童謡は「歌ふ人の心任せで差支えない」（童謡小曲第一集「解説」という考えを持つようになっていました）。

今年の八月八日飯田市で開かれた「人形劇フェスティバル」に私は自作の劇を今年も持参して参加しました。上演先に決まっていた竜岡地区で、偶然にも大正十二年の春に晋平がここで「シャボン玉」を指導した時の写真や招く側の中心になった、自由画教育の実践で著名な木下紫水などの手紙を保存しているKさんに出会い、お話をする機会に恵まれました。「唱歌」以外を認めない古い体質の学校のなかで、晋平等を招いて「童謡」を指導する場を設けた竜岡小の職員集団の心意気にたいく感動しましたが、同時に、子どもに対して純粹に向き合う晋平の姿に触れて感銘を受けました。

晋平音楽は何故愛され、広がりを持ったのか

二〇〇七年の春に「親子で歌いっこ」日本の歌百選」という催しがあり、票で行ったもの。その中に晋平が創った曲が六つ入っています。この数は勿論第一位です。戦後晋平が亡くなったからですが、戦後晋平が亡くなったからのことですが、「てるてる坊主」はポロニアで開かれた子どものための作曲国際コンクールで優秀賞に選ばれています。彼の作品が愛され、歌い続けられていく秘密はどこにあるのでしょうか。私は晋平が「自由」を最大限活用し、創作上の「限定のなさ」の確保に彼らしいやり方で迫り、創作したからだと考えています。つくりあげた場は新しい思考を生む土壌になりました。

作曲家としてのデビューは抱月・須磨子の「劇中歌」でした。その作品の底に流れている考えは自立しようとする女性への応援歌です。かのエレノ・ケイが「二十世紀は女性と子どもの世紀」になると予言しましたが、正に晋平はその応援役を担ったのです。「カチューシャの唄」は最初こそ「文

字ある階層（インテリ）の支持だけでしたが、やがて広く大衆に愛されるようになり、一世を風靡するようになり、壺井栄の自伝小説『風』の主人公茂緒（栄がモデル）は役場に勤めていますが、彼女は自己主張する度に「カチューシャの唄」を口ずさんでいた様子小説に書き込んでいます。そうした性質の歌として受け止められていたのです。雑誌『新日本』（大正九年十一月号）の巻頭論文「大正世相史観」（松崎天明）は「カチューシャの唄」（松崎天明）は「カチューシャの唄」が「時代のキーワード」になっていることを報じています。

しかし、全てが順調であったわけではなく、劇中歌（九州日日新聞昭和三年六月二十七日付他）されました。劇中歌が織り込まれた劇が丸ごと上演禁止になったことすらありました。抱月と須磨子が亡くなり、劇中歌が創れなくなつてから始めた「童謡」は学校からシャットアウトされていきました。「国家・国土の称揚、皇室崇拜をはじめとして国民意識の発揚に資するのが唱歌」であり、童謡は危険とされて受けてくれたのは自由教育をしていた（先に触れた長野県竜岡小学校など）限られた所だけでした。♪枯れススキのレコード化は三年間待たされた、庶民の中に広まるようになると今度は「こんな歌が流行するから大震災が起るのだ」というめっちゃくちゃな理由によるパッシングが晋平に襲い掛かりました。歌謡曲『東京行進曲』は♪粋な浅草遊びあひ♪といった歌詞が通信局の逆鱗に触れて、放送禁止歌謡曲に指定（東京日日一九二九年六月十五日付）されました。晋平は禁止に次ぐ禁止にもめげず、流行歌がだめなら小唄で、とジャンルを変えて創作活動が続けられます。そうしたなかで強い支持もまた広まりました。『東京行進曲』の内容を襦袢に染め込んで楽しんでいた様子は映画に入れておきました。しかし、時代はそうしたことを許しませんでした。当時の文部省は個別の歌の禁止だけでなく「鎖歌政策」（東京日日八月二十八日付）を採用、「歌の検察官」を創設「音楽浄化」に乗り出しました。大坂や秋田ではこの制度が先行実施され

ました。創作を支えた人々のユニークさ

いくら考えが前向きであつても一人ではどうすることもできません。晋平には、その生き方を共に考え、歩んだユニークな人がたくさんいます。例えば荒畑寒村氏、学生時代から親交があり、劇中歌をはじめとした楽譜の表紙を引き受けてくれた竹下夢二氏といったヒューマニズムの立場に立った人々です。その全てをここで挙げるわけにはいきませんが、今回は日常的に創作活動を共にした別分野の人を取り上げてみます。

作曲家中山晋平の生誕百二十周年記念の映画を作っている人達（つまり私達です）がいてインタビューをされる」という書き出しの『山下洋輔の文字化け日記』（小学館文庫二〇〇九年刊二四八〜二四九頁）の最後の方に「中山晋平の活動期、そのピアノ伴奏で踊つた革新的な日本舞踊家藤蔭静枝という人がいる。この二代目の人が京都にいてこれまた二〇〇〇年にニューヨークトリオと共演をしたということがあつた。その話もする。初代の藤蔭静枝師匠はパリから晋平さんに電報を打つて送金を頼んでいる（後略）」と記述されている藤蔭静枝さんのことなんです。晋平には仕事の上で「晋平ファミリー」と周りが言われた人が三人いました。藤蔭静枝さん、平井英子、それに舞踊家の藤蔭静枝さんです。この三人は創作活動全般について忌憚なく話し合う仲間でした。時にはお互いに自己主張を曲げないために舞台の上で取っ組み合いをすることもままあつたとはいえますから正に「自立した女性たち」と晋平でした。

藤蔭静枝さんはその生涯に十五回も名前を変えざるほどの波乱万丈の生き方をした人です。若いときは「文学芸者」の別称もついた文学愛好家で、佐々木信綱門下の歌人として著作もありました。彼女をモデルにした作品は片手に余るほどあります。例えば永井荷風の『花火』、吉井勇の『月』、小山内薫の『足拍子』、等々。彼女は永井荷風と結婚したものの彼女の方から三行半を突きつけたこともありました。芸者をやめて日本舞踊の革新の旗手（戦後はこのことが評価され紫綬褒章、文化功

労賞などを受章）として立ちます。彼女は、言葉に合わせ踊る「当て振り」を否定したことでよく知られています。その心は晋平の曲づくりに通じているものがあり創作上の又とない同志になり、お互いを支えあいました。「パリからお金を頼む間ね、だつたのです。彼女がプロレタリア作家勝本清一郎とも親密で、その勝本が表した「芸術運動における前衛性と大衆性」という著書は晋平にも渡っています。こうした人脈での仕事をしていったからでしょうか、晋平は「自由大学」の講師を引き受けています。「自由大学」とは一九二〇年代のはじめから三十年代のはじめにかけて長野県、新潟県を中心に全国で展開された「地域民衆の自己教育運動」です。哲学の土田杏村、同志社大学の恒藤恭教授、文学のタカクラテル、治安維持法に反対してテロにあつた山本宣治代議士などが講師を務めました。晋平が講師をしたのは新潟県、一九二三年八月六日にある新魚沼自由大学、一九二五年八月一日の六日町で開かれた八海自由大学の二回です。講師の顔ぶれを見ても分かるようにいずれもベラベラな考えの持ち主ばかりです。そうした人々と一緒に講師を引き受けるということは勇気のいることです。講師は例外なく「アカ」といわれていましたから。

晋平が活動した時代は日本が近代化を精力的に進めた時代です。近代化の進行とともに社会の矛盾は深まり、米騒動にみられるように「庶民」が歴史の表舞台に登場してきます。レコードに続いてラジオ電波が発射され、モードメディアが身近なものになったことも特徴的なことです。晋平はその後半生は職業音楽家として生きます。

一九三七年七月に起きた「満州事変」、一九三七年七月の盧溝橋に端を発した日中戦争、そして一九四一年十二月の真珠湾攻撃にはじまるアジア・太平洋戦争。人々は否が応でも「戦火」と向き合わなければならぬ時代になっていきまわりました。陸軍、海軍、情報局、大政翼賛会が主導した「総動員体制」が築かれ、そこに音楽家も日本音楽文化協会を通して組み込まれて行きます。「音楽は軍需品」と言つた（一九四一

年七月）のは海軍省軍務局第四課長の平出英夫氏ですが、権力は音楽をそのように見ていたのです。内務省は検閲を強めるだけでなく、「流行歌」を国民の教化・動員の手段にしました（一九三七年）。政府機関や新聞社は公募などの手段で運動の先導役を担いました。これらの企画で生まれたものは、「露営の歌」（東京日日と大阪毎日 古閑裕而）『海ゆかば』（国民精神総動員運動強調週間テーマ曲 信時潔）愛国行進曲（内閣情報局公募）などいっぱいあります。晋平もこうした曲を委嘱されることがありました。朝日新聞による一九四二年六月の「勤労報国歌」懸賞募集がそれです。入選歌の『楽しい奉仕』（入選は吉川鷲さん）の曲は伊藤翁介さんがつくりました。佳作の『われら勤労報国歌』（藤瀬雅夫さん作詞）の作曲は晋平が委嘱されました。晋平は締め切りギリギリまで苦闘しましたが、出来栄はよくひとつで済んだ。急がされると、曲づくりは生来遅いので」と言い訳をしますが、そうしたものが通じる相手ではありません。拒否すれば牢獄が待っていました。このような仕事は晋平の世界とは異質なものでした。

晋平の姿勢がどのようなものであつたかがわかるひとつのエピソードを明らかにします。それは一九四二年（昭和十七年）八月二十二日付と二十四日付、それに十二月二十四日付の東京朝日新聞の記事です。当時、商工省と農林省は「南方建設」つまり侵略して獲得した東南アジア諸国での日本語普及と日本精神涵養のために音楽を輸出することにしました。八月二十三日付の記事は晋平等が選んだ四五曲を紹介しています。「からたちの花」「浜辺の歌」「荒城の月」「別れのブルース」「宵待草」「酒は涙か溜息か」「かっぱれ」「島の娘」「愛馬行進曲」「江刺追分」「唐人お吉」「砂漠の旅」「海ゆかば」……。しかし、この選曲は上層部が気に入らなかつた模様で、八月二十六日付の記事では「全部破算」改めて選定作業をすることがニュースになっています。

そして十二月二十四日付の新聞に掲載された歌は「君が代変奏曲」「さくら変奏曲」「千鳥」「松竹梅」「六段」「越後獅子」「靴がなる」「さくらさくら」

『兵隊さんよありがと』『めんこい子馬』『箱根八里』『愛国行進曲』『軍艦行進曲』『月月火水木金土』というものでした。これ以上解説を加えることはやめましょう。富子さんは「軍人は嫌いだ」と晋平が呟くのを何度も聞いたそうです。事態は速度をあげて破滅に向かつて進んでいました。晋平はそうしたなかで、ゲーテがよく使った「Dnsagen」（諦念しつゝある人）にならざるをえなかつたようです。息・卯郎がまとめた記録によると、一九四四年には三つ（仁科工業社歌）相馬御風詩、岩見沢市市歌、奥保詩、『価値なき太鼓』岡本太郎詩）しか仕事をしませんでした。敗戦の年一九四五年には全く作曲を止めた作品を創ることに、大衆を光源とした作品を創ることに、ひそやかな希望を持っていた晋平でしたが、叶えられなくなつた時代に作曲を諦めたのでしょうか、ペンを勤緻に持ち替えて土を耕す姿が見られるようになりました。

意味するところに沿って歌われんことを

敗戦によって、再びペンを手にした晋平は『憲法音頭』を一九四七年五月に完成させます。しかし、この作品は普及半ばにして政治権力が憲法改正の方向に舵を切つたため埋もれる運命となりました。一九五二年十二月、友に誘われて晋平は映画『生きる』（黒澤明監督作品）を観ました。そこには二十八歳の時につくつた「ゴンドラの歌」が使われていました。死の二十八日前のことです。ゲーテが三十一歳の時に作つた「すべての山々の頂に静かさが広がる」という詩を書き付けた壁があるギッケル・ハインの狩猟小屋を訪ねたのもやはり死の前でした。五十年ぶりの自作との再会に感慨深げだったゲーテのことは良く知られています。母の死と引き換えに得られた♪いのち短し♪の晋平の歌はゲーテ同様、彼の生涯を最後まで伴走する曲になりました。ところが、映画の後半に入っておき晋平の様子が富子さんによって明らかになりました。何故妻のタネさんでなく富子さんだったのか。坊空法によって重要人物扱いになった晋平のサポート役に富子さんが指名されていた

(そのため、怖くても疎開は出来なかった)からだ、という説明をすることに今回は留めて置きたいと思えます。富子さんの申し出によって、ある時期までは伏せる約束があるからです。その他幾つかの事実の公開は先送りになりました。しかし、今回の映画では実に沢山の事実の掘り起こしをすることが出来ました。須磨子の歌うポーズは手を叩きながらであったこと(藤原洗なつめるの人々)、『カチューシャの唄』のレコードは二万枚ではなく二〇〇〇枚だったこと(大阪毎日大正四年三月十三日)など、いっぱいあります。いずれの日にか有能な人によって世に出してほしいと念じています。

それにしても、晋平が亡くなってから二十年余の月日が既に経っています。晋平の作品はそれぞれの意味するところから沿って歌われることを待ち望みながら死後の生を生き延びるようになって来られてなりません。

(二〇〇九年八月十八日 記)

**音楽ドキュメント映画
「ララ、歌は流れる中山晋平
物語」鑑賞と晋平曲の合唱**

高根 恒子
(文理学部人文科学科1966年卒業)

総会後は経済学部第一講義室において映画鑑賞会がおこなわれた。一般市民も含めて百二十人ほどが楽しんだ。ここでこの映画の内容を紹介してみたいが、もし勘違いや誤解があればお許し願いたい。

「ララ歌は流れる中山晋平物語」のタイトルが示すようにこの映画の中には晋平の作曲歌が二十一曲も流れている。松井須磨子に扮するソプラノ歌手の「カチューシャの唄」、「ゴンドラの唄」、「子供の歌手の「肩たたき」「シャボン玉」あり、大人の合唱「旅人の歌」あり、山下洋輔のジャズピアノあり、演歌師の「パイオリンとカチューシャの唄」等多彩である。彼が一生の間に作った曲は三千曲とも言われている。晋平は長野県中野に明治二十年(一八八七年)に生まれた。村長であった父は四十五歳で死亡しその時彼は六歳であった。

母「ぞう」の支えもあつて苦勞の末代用教員になった。しかしそれに飽きたらず東京で島村抱月の書生をしながら東京音楽学校を卒業した。抱月の依頼でトルストイ原作の「復活」の劇中歌として大正三年(一九一四年)二十七歳のときに「カチューシャの唄」を作曲した。これは日本古来の俗謡とドイツの中間のメロデーを目標としていたのだ。これは須磨子自身の歌声をレコードで聞かせていて貴重である。これは竹久夢二が楽譜の表紙絵を描いたことと演歌師によって全国にひろまった。「神に願いをララかけましょか」の「ララ」は彼自身が故郷の村祭りで見聞きした舞い・式三番叟から思いついた雑言言葉であり、曲を引き締めているという。明治政府文部省音楽取調掛長伊澤修二たちの方針により古今和歌集出典の格調高い小学唱歌が国文学者により作詞されていた時代からすでに三十年経っているといえ、このような砕けた感じの「ララ」が使われたことはさぞかし新鮮な驚きを民衆に与えたのではないだろうかと思ふ。大正八年から始まった童謡運動にも参加し、今年までの型にはまったものではなく、子供の目線に沿った本当に歌いたくなるような曲作りを目指していった。池田町出身の浅原鏡村作詞の「てるてる坊主」は晋平が童謡のメロデーを元にして、転調を少なくし、低すぎる音を直して歌いやすいように工夫して大正十年(一九二一年)に作曲したものである。これはイタリアの国際コンテストの優秀曲に選ばれている。野口雨情作詞の「訃城寺の狸囃子」は振りがついで子供が楽しげに踊っている。戦後始まったラジオ英会話のテーマ曲「カムカムエブリボデー」としてもおなじみである。ジャズピアノのトの山下洋輔氏はこの絶賛している。「砂山」を初めとして「あの町この町」、「シャボン玉」、「雨降りお月」などの晋平メロデーはすばらしい。日本音階だけでなくそれに独特の節回しがあり掘り起こしても尽きない大きな何かを埋め込みにも励んだ。端唄を元にした民謡作りにも励んだ。大平は地方でまず「須坂小唄」がうまれた。「東京音頭」は今やクルトスワローズの応援歌となっている。「越後十日町小唄」は映画の中では市丸が歌っているが私

にとつても越後出身の友人がよく唄ってくれた懐かしい民謡である。晋平の民謡には「野沢小唄」の「ユラユラユラリは湯のけむり、チャラチャラチャラリは水の音」のように作詞者と組んで、ふんだんに囃子言葉を入れているのが特徴のようにある。彼は民謡作りの依頼が入ると必ず現地を見に行ったという。

又軍国主義の嵐のなか軍歌指名作曲家となつたが軍人は嫌いだと言つていた。一九四四年には工場より依頼された曲も含めて三曲しか作らなかつたし一九四五年には一曲も作らなかつたという。一九四五年の東京大空襲のなか義父晋平の手を引いて逃げた思い出を長男卯郎の妻中山富子がユーモアを交えて語っている。

「大衆の口さむ調べと共に私は生きる」と晋平が述べているように彼の目指す芸術の方向ははっきりしていた。①大衆に受け入れられる芸術②皆が口ずさめる親しみやすい歌作り③日本人に長年支持されてきた伝統芸能の上に西洋芸術を取り入れる。等が師島村抱月からの教えであり彼はそれを守つて極めてきた。それ故後に続く者も多々という。時代のふるいにかけられてもお歌い続けられている晋平の曲が多いのはこういう理由によるものだったのだらう。この映画の副題「音楽ドキュメント」が示すように資料に基づいて晋平の生涯の順を追つて描かれている。誇張や押し付けが無く抑えられた現のなかに含蓄があり、見ていてさわやかである。野口清人監督は文理学部独文科で私には先輩にあたる方なので、お人柄がそのまま映画に反映している気がして嬉しくなる。映画の最後に流れる吉井勇作詞の「ゴンドラの歌」は大正四年(一九一五年)二十八歳時に抱月より依頼されて作曲したツルゲーネフ原作「その前夜」の劇中歌である。これは母危篤の知らせを受けて中野へ急ぐ汽車の中で作曲したものだそうである。晩年晋平は映画館で黒澤明監督の「生きる」を見た。ハイライトシーンの志村喬ふんする主人公が「ゴンドラの歌」を歌うのを聞いた。映画の主人公に死期が迫っていたのと同じように、その二十八日後彼はすい臓炎のため死去した。享年六十五歳であった。「命短し恋せよ乙女」と澄んだソプラ

文理学部卒業生からのたより

ノが朗々と流れてこの晋平映画は終わっている。特別出演の歌手島倉千代子のナレーションが映画に花を添え、しみじみとした温かい雰囲気をかもし出している。松井須磨子に扮する歌手が歌っている舞台はわれらが母校重文景の森の講堂だろう。全編に登場する長野県の風景はみずみずしく透明感がありこの映画をいっそう魅力的にしている。こんなすばらしい映画を作つてくれた野口清人先輩に乾杯。

鑑賞後の観客の反応はアンケートにも現れているように好意的なものばかりであった。休憩後音研OBと賛助四人の十六人で十分間晋平の曲の合唱をした。指揮は佐久隆明氏、ピアノは大倉孝子氏、曲目は音研OBの「砂山」

昭和二十四年六月に文理学部が創設され、文理学部同窓会の会長は文理学部長が兼任し特別な活動はなかつたようです。昭和四十六年三月に最後の卒業式で、文理学部は解消されました。この時点で同窓会会長がいなくなつたというところから、先輩諸氏の尽力・奔走により正式に同窓会が発足することになり、昭和四十七年五月七日に第一回総会が開催され、八月二十五日に会報第一号が発行されました。その巻頭の初代会長の鎌倉通敏氏(第一回英文卒)の挨拶文を転載します。なお、鎌倉通敏氏は平成十一年にお亡くなりになりました。

鎌倉通敏

私はこの日ごろ、熊井啓君の作品のほかはほとんど映画を見ない生活に追われていますが、かつて「史上最大の作戦(The Longest Day)」というのを見たことがあります。第二次世界大

「ゴンドラの唄」、会場全体の「背くらべ」、「雨降りお月」である。「砂山」はたった二日の練習では不十分だったというところもあり四部合唱が八部合唱に聞こえたのではないかと恐縮している。「ゴンドラの歌」は斉唱といつてもあり朗々と気持ちよく歌うことができた。会場全体の歌もスクリーンに歌詞が出て懐かしい気持ちでみなさんが歌つてくれた。翌々日の六月七日付市民タイムスには合唱の写真載せて頂いたし、賛助の佐藤進氏がイベントの様子を七月三日付市民タイムスのコラム欄で紹介して下さるとい嬉しいおまけもついていた。その後は中野和朗元松本大学学長の人物紹介と野口清人監督の「映画作りの苦勞話」が続く。以上。

戦終結への端緒となつた連合軍のノルマンデー反攻作戦。その総司令官の決断への逡巡、将棋の駒として次々に橋頭確保のために悲しくも明かに散っていく兵士たち……

この度、とてもその器でない会長を引き受けざるを得ない破目になってふと心に浮かんだのは、あの映画の幾つかの場面でした。ひとが共同して大きな仕事をするためには、誰かが捨て石にならなくてはならない。やがてこの同窓会が大きく生い繁る日を夢見つつ、私はその捨て石にならう。こう考へて、穏やかならざる気持ちと逃げ口上を私は自分に禁ずることにしました。思えば、昭和二十四年(一九四九)の夏、新しい意気込みをもって誕生した文理学部の理念は、人間の疎外が叫ばれ、環境問題が大きく地球を脅かしている今日、いよいよ切実であります。

新しいLiberal Arts and Scienceの広い視野からの構築、一握りの体制のリタイアをでなく地の塩をいたるところに、というあの理念は正しかったのです。その後信州大学は、文理学部を人文科学部と理学部に「発展的解消」させましたが、私たちは、あのヒマラヤ杉の翳ゆたかなるキャンパスを基地として、各自専攻の知識技能の錬磨に励みながらも異種の専攻の人びとが絶

平成22年度総会案内

経済学部同窓会総会を下記のとおり開催いたします。
会員の皆様のご出席をお願いいたします。

信州大学経済学部同窓会
会長 矢口晋司

日時 平成22年5月22日(土) 午後3時より
場所 信州大学経済学部 新棟6階 会議室

- 議題
- 1 事業報告および会計報告の承認について
 - 2 予算および事業計画について
 - 3 役員選出について
 - 4 その他

- 議題に先立ち、経済学部長より、経済学部および信州大学の現況と展望について、ご講演いただく予定です。
- 総会後には懇親会を企画しております。
(会費制 2000円)
- 総会および懇親会ご出席の方は、事務局までメールまたは電話(火、木の10~15時)でお知らせください。
(メールアドレス、TELは一面参照のこと)



えず親しく交わり、人間としての拡がり深まり、「此処と今」の奴隷とならぬ英知、を求めあつたあの青春を誇りとするものであります。

高度工業社会といひ、情報化社会といひこの激浪の中で、私たちの同窓会は、あの文理学部の理念を忘れぬ、清らかな交流とサービスの機関でありたい。

池田雄一郎学長はじめ諸先生のご支援と、馬瀬良雄君を中心とする今や公私とも多忙を極めている年輩の有志の献身的なご尽力とによって、この同窓会の活動はやとと緒についたものであります。

私とえにこれを生き生きと育てるのは、ひとえに会員おひとりおひとりのお力です。この会の特色が十分に発揮され、この会が『味』ある発展を遂げんことを心から願いつつご挨拶に代えさせていただきます。

文理学部会報第一号(一九七三年八月二十五日)より

女子寮の思い出

渡辺 瑛代(旧姓 村木
文理学部自然化学科1962年卒業)

私が信州大学文理学部へ入学し、女子寮に入ったのは五十年前昔のことです。寮は薄川の近く(松商学園の東側)の木造二階建ての家で、一階部分には哲学の渡辺先生のご家族が住んでおられて、二階の七室ほどが女子寮となっていました。寮生は文理学部の学生のほかに医学部教養課程の学生も合わせて十人前後でした。原則として相部屋でしたが、上級生になると個室という構内にあった男子寮(思誠寮)の食堂の一角の特等席で、一日三食一〇〇円の食事を頂きました。日曜日は朝食にパンが出ましたが、昼と夜はパンを持って美ヶ原まで行ったことが何度ありました。『美し』と言いなれて、自分たちの山という感じでした。女子寮にはお風呂もなく、電話も洗濯機もテレビもなかったけれど、当時

経済学部同窓会理事会報告

は不自由だとは思いませんでした。先輩に喫茶店に連れて行ってもらい、コーヒを飲んでクラシック音楽を聴くという経験をしたのは人生の初体験であって、至福の時間でした。すっかり気が入ってしまつて、アルバイトのお金が入るとせつせつと通いつめたものです。コーヒ一杯で何時間も居続け、曲のリクエストをする学生に対し、店主さんは親切だったものだと思つてつくづく感謝の思いがします。

親戚と言え、当時アルバイトとしては家庭教師の需要が結構多くて、どこのご家庭でも信大の学生さんと言つて大事にして下さいました。

寮の話に戻ると、時々駄菓子コンパと言つてはお喋り会をしました。それぞれの実家から送られて来た食料や近所のお菓子屋さんで買った駄菓子を食べお茶を飲んで、おしゃべりをしまし

入寮した頃の先輩たちはとても大人に見えたものです。時が過ぎ自分がその先輩になつたときに、とてもそうとはなれませんでした。当時一時同室だった後輩とは、その後五十年のお付き合いをしていますが、あの頃の思い出と言え、私の寝床からネズミが出てきたことだけだと言います。

私は彼女がお寝坊で起こすのが大苦勞だったと逆襲しています。

六十年安保闘争の頃で、私は次第に心がそちらへ向き、女子寮の生活の比重は少なくなり、卒業後、結婚して薄川近くのアパートで暮らしたことがありますが、女子寮へ行つたことは一度もありませんでした。女子寮での出来事を書いてみて、思い起こすと自分の青春時代はあの寮と共にあつたのかと思われ、この次松本へ行つた時には、あの場所へ行つてみようと思つて

- 日時 平成22年1月16日(土)
午後3時より
場所 松本市 ホテルモンターニュ
- 1 開会(樋口教授)
 - 2 同窓会長挨拶(矢口会長)
 - 3 経済学部長挨拶(代理 長瀬副学部長)
 - 4 報告事項
 - (1)平成21年度同窓会活動報告について
 - (2)前回理事会以降の活動内容について矢口会長より報告。
 - (3)信州大学同窓会連合会活動報告について
 - (4)前回理事会以降の活動内容について矢口会長より報告。
 - (5)人文学部同窓会設立30周年記念式典について
 - (6)平成21年11月7日に開催された標記式典の内容について矢口会長より報告。
- ◎会則に従い、矢口会長を議長に以下協議事項

- (1)終身会費の徴収状況について
 - (2)平成21年12月末現在、814名であることを確認。
 - (3)今後とも会員への依頼を重ね、徴収率を上げることを確認。
 - (4)文理学部社会学科卒業生より、終身会費納入希望がある旨、事務局より報告有り、取扱について協議し、終身会費では無く寄付金として整理することを決定。
 - (5)同窓会総会について
 - (6)開催日時 場所について協議し、平成22年5月22日(土)に松本キャンパスで開催することを決定。
 - (7)同窓会設立30周年記念行事について
 - (8)平成24年3月19日に同窓会設立30周年を迎えるにあたり、記念行事の在り方について意見交換を実施し、今後検討を重ねることを確認。
 - (9)議長退任
 - (10)閉会(矢口会長)
- ◎午後4時30分に閉会となる。(会長)

編集後記

♪はしらのぎすは おとしの
五月五日の 背くらべり ちまたたべたべ 兄さんが、はかたてくれた背のたけ、きのうくらべりや、なんのことう やつとはおりの ひものたけ

この歌を口ずさんだことのない人はいないであろう。もうすぐ五月である。この曲をきくと、子供のころの風薫る五月の心象風景が各人各様によりがえってくるであろう。

しかし、である。案外、この曲をつくつたのが信州中野出身の中山晋平であるということ、そしてこの晋平がどのような作曲家であつたのかを知っている人はそう多くはないのではなからうか。

晋平の多くの作品が愛され、歌いつづけられている秘密はどこにあるのか、信州大学文理学部出身の大先輩である野口清人監督が寄稿してくださいました。少々長文なので編集会議としては紙幅の制限もあり苦慮したのであるが、一読し一挙掲載しなければならぬと判断した。玉稿である。

昨年(二〇〇九)六月の信州大学創立六〇周年記念行事の一環として、文理学部同窓会は、野口監督の『ララ、歌は流れる—中山晋平物語(二〇〇七年制作)』映画鑑賞会を主催された(人文・経済・理同窓会共催)。この鑑賞会の様子については、同じく文理学部大先輩の高根恒子氏から寄稿をいただいた。



(事務局)